

外国語教育における Speak Everywhere の 有効性について

—韓国語の文字と発音のずれを中心に—

朴 南 圭
田島ますみ

- <目次>
1. はじめに
 2. 韓国語教育の現状と問題点
 3. 学習目標と学習上の困難な項目
 - 3.1 韓国語科目の学習目標
 - 3.2 韓国語の文字と音のずれについて
 4. Speak Everywhere と韓国語教育への活用
 - 4.1 Speak Everywhere とは
 - 4.2 SE の具体的な実施例
 5. 導入のための SE の検討事項
 6. おわりに

1. はじめに

近年の社会的要求の高まりにより、教養科目に韓国語⁽¹⁾を採択する大学が増えている。大学で韓国語を学ぶ機会が多くなることは、より多くの学生が授業の中で韓国の歴史や文化に触れることになり、彼らのことばと文化の理解を通じて民間の交流が活発になるなど多くの面で両国関係の役に立つことになる。

韓国の言語や文化を理解する人材は、重要性を増している両国関係のみならず、多文化共生社会をめざす日本の地域社会でも重要な役割を担うことができるだろう。今後履修者が増えることは日本のみならず韓国にも意義のあることは間違いない。

しかし、大学の韓国語教育の現状をみてみると、教養の語学科目として所定単位を履修してもコミュニケーションツールとして「使える」韓国語が身についている受講生が多くないことも事実である。

2011年度、中央学院大学法学部で2年間の履修を終えた受講生にアンケートをとったところ、回答者のほとんどが、会話はあいさつ程度しかできないと答えており、授業においても知識を問う質問には答えられるものの、文レベルの表現を展開する会話ができるにはいたっていなかった。このような状況では、日常生活の場面でさえも韓国語を使って意思疎通を図ることはとても難しい。

そのような状況を生み出した原因は、大学での韓国語教育が、テキストを中心に行われており、個人にはわずかな発話時間しかなく、発音やスピーキング練習全般にあてられる時間があまりにも少ないからである。そのため、簡単な日常会話であっても、その場面にふさわしい単語が思い浮かばないほど緊張したり、発音に自信が持てなかったりする例が多い。

このようなテキストを主教材とした読み書きが授業の中心にならざるを得ない理由は、

- 1) 時間数
- 2) 教材
- 3) 評価の方法

の三つがある。時間数について言えば、まず、大学の教養科目としての語学の時間数はかなり限られている。その上で、読み書き中心の授業を行うならば、受講生の発話に使う時間は極めてわずかなものにならざるを得ない。教材の問題は、内容が発音指導に関して工夫されているものが少なく、テキストに添付されたCDも単調な朗読だけでインターアクティブに練習できるように工夫されたものが少ない。さらに評価の方法については、成績を出すために客観的な評価が必要な大学の授業では、記録として残らない音声テストより筆記テストによる評価が大きな比重を占めることになり、筆記テストが多くなる傾向がある。筆記テストを行うためには、文字の読み方と同時に書き方を身につけさせる必要があり、結果的に文字の習得や書き方の学習に多くの時間を費やすことになる。

しかし、多くの学生が望んでいる韓国語の能力は、コミュニケーション能力であり、聞いて話すことである。次節に述べる学生たちに実施したアンケート結果、その中でも特に1年生の結果はそのことを如実に物語っている。それにも拘わらず、学生たちのニーズに応える教育が多くの現場ではなされていないのである。大学で初めて接する外国語であるゆえに、それまで学習してきた言語と違う期待をもってきた受講生に、コミュニケーションができる言葉を目標として韓国語の授業が行われるべきである。

2. 韓国語教育の現状と問題点

中央学院大学法学部において、2011年4月、授業開始前に行った事前アンケート調査で韓国語選択者の目標や期待について質問したところ、以下のような回答が得られた。

少しは話せるように

基本を覚え使えるようになりたい

ある程度文が書けたり、しゃべれるようになる。

五十音くらいは出来るようになりたい。

韓国に行くための最低限の知識を入れたい

日常会話ができるレベルにはなりたいです

ペヨンジュンと話す

日常会話が話せるようにしていきたい

基本的なことをしゃべれるようになる

読むことが出来るようになりたい

(1年生, 未習者クラス)

文を読むことが出来るようになる (4)

基本を少しでも分かるようになる (4)

読み書きが出来るようになりたいです (2)

話すことが出来るようにはなりたい (2)

読めるようになる (2)

あいさつ程度の会話 基礎はできるように。(2)

ある程度できるようにしたいです。(2)

文法をしっかり覚える (2)

単位とる (2)

会話が聞き取れるようになる (2)

文字を読めるようにする (2)

できれば韓国語の検定に受かれるぐらいになりたい (2)

ある程度の会話を出来るようにする (3)

毎回出席し、確実に取りたいと思っています。(2)

韓国語を覚える (2)

読みがすんなりできるようにしたい。(2)

読み書きができるようなる (2)

このことから考えられることは、1年生は、韓国語をコミュニケーションツールとしてとらえ、会話を通じて韓国語話者と円滑な意思疎通ができることを目標としている場合が多い、ということである。韓国語を選択するとき、仕事や研究に役立てようとするよりは、身近な存在として韓国を認識し、そこに住む人とのコミュニケーションをとることを目指している。しかし、1年間授業を受けた既習者の場合の目標は読むこと・文法の学習へと変わり、試験のためや単位取得のためへと大きく変化している。

この結果は、1年間の学習において目標が変化しているというよりは、韓国語の授業が、話すことより読むこと、書くことを重視し、単位や資格取得へ目を向けさせるような現実を1年間経験したための変化と考えられる。

個人の学習目標が変化した原因をさらに分析してみると、以下のことが挙げられる。

- 1) 授業の評価が文字表記による筆記試験中心である。
- 2) 文字を媒介とする授業で会話への興味を維持することが難しい。
- 3) CD等の教科書の付属教材が機能を果たしていない。
- 4) 韓国語を試す場がない。
- 5) 会話は学習者の自主的な意欲に頼る。

限定された時間での発話の練習のため、発音の訓練が十分ではなく、授業以外に有効な発音修正手段がないことが、単語や文を知っていても発話できない、発音に自信を持ってないという状況を作っているといえよう。

今の状態では、韓国語の授業は単位をとるためのものであり、韓国語はコミュニケーションツールとして意識されていないと言える。

3. 学習目標と学習上の困難な項目

3.1 韓国語科目の学習目標

では、大学での韓国語授業では何を目指すべきか。大学の教養科目として開設された講座を民間の語学スクールやビジネススクールと比較すべきではないが、語学学習の目安として目標設定は必要であり、その中でコミュニケーションツールとしての機能が習得できるよう話すことを重視していくべきである。

現在、中央学院大学法学部において語学科目の授業時間数は、週2コマ×30週あり、それを2年間履修すると、180時間の授業時間を確保できる。授業時間および予復習の時間を考えると、韓国語能力試験で要求する目安の時間で2級程度の会話のレベルに到達するように設定することが妥当である。

表1は韓国の公的機関が実施している韓国語能力試験のレベルを規定する表の一部である。試験自体は筆記テストのみであるが、要求されるレベルは参考になる。1級は初歩レベルであるが、法学部の週2コマ、2年間の履修を終えても、ほとんどの修了者の会話能力は1級にも届かないのが現状である。

表1：韓国語能力試験⁽³⁾レベル表（1～6級のうち1，2級のみ抜粋）

級	学習時間の目安	要求される能力
2級	300～400時間	電話やお願い程度の日常生活に必要な表現、郵便局、銀行などの公共機関での会話ができる。1500～2000語程度の語彙を用いた文章を理解でき、使用できる。
1級	80～120時間	自己紹介、買い物、飲食店での注文など生活に必要な基礎的な表現を使うことができ、身近な話題の内容を理解、表現できる。800語程度の基礎的な語彙と基本文法を理解でき、簡単な文章を作れる。

3.2 韓国語の文字と音のずれについて

韓国語の学習において、学習者が困難を覚える項目の一つに文字と音のずれということがある。韓国語の、一つの音節⁽⁴⁾は書かれた通りに読み、耳にした通りに書ける。しかし、文になると、多くの場合、書かれた通りに読めば、相手に通じない音になり、耳にした通りに書けば正字法で間違いになる⁽⁵⁾。

この点が、ひらがな、かたかなに関しては文字が表す音をそのまま読んで音と一致する日本語との大きな違いであり、日本語話者になかなか習得できない点である。文字と音の違いに慣れるためには多くの時間と訓練が必要である。

従来一般的な指導方法は、表記された文字が実際の発音ではどのようなのか、発音の変化としてまとめた法則を教え、それらを公式のように暗記するよう促し、公式が必要な場面で活用できるようにすることは学習者の自主的な努力に任せている。授業で使われる文章だけに振り仮名を振って読んでいても応用ができるようになることは期待できないが、応用のための練習を授業で行う時間はなかなか確保できない。

例えば、これらの法則の一つである連音化は、文字表記において받침 (パッチム：終声子音)⁽⁶⁾の後にㅇが来ると、받침がㅇのところに移って発音されることをいう。以下に例を挙げる。

국어 (国語) → 구거
 맛이 (味が) → 마시
 단어 (単語) → 다녀

指導する際には、正字法では上記の左側のように書くが、口頭では右側の音で発音する、というように法則を説明して練習をする。つまり正しい発音のためには頭の中で右側の字に変換し、それを読むようにする。書かれた字

を正しく発音するためには文字を変換する必要がある。鼻音化、激音化、口蓋音化、側音化、流音化、濃音化の説明でも同じようなことが行われている。

このように文字と音の間にずれがあるため、子音と子音が隣り合った場合の発音の変化や学習した単語を文の中で正しく発音できているかどうかを確認することは不可欠である。授業の中で法則の説明と例示をし、個人でそれぞれの事例をクラス外で学習することは重要である。しかしながら、実際クラス外での学習はあまりされていない。

4. Speak Everywhere と韓国語教育への活用

4.1 Speak Everywhere とは

以上のような韓国語の文字と音のずれを理論のみならず、直感的に身につける有効な方法が Speak Everywhere の活用であると考えられる。Speak Everywhere⁽⁷⁾は、2009年、パデュー大学の Center for Technology-Enhanced Language Learning において作成された、Web を利用した外国語学習のためのシステムである。2011年より有償で一般公開されている。

SE の最大の特徴は音声ファイルを Web 上で扱うことができる点にある。教員は、授業の目的や学生のレベルに応じて、課題や問題を音声や映像ファイルとしてアップロードすることができる。学習者はそれらのファイルを Web 上で受信し、課題や問題への解答を、文字ではなく音声で作成し提出することができる。課題や答案の録音は LL 教室でなくても、インターネット環境とスピーカー、マイクがあればどこでもできる。これにより、学習者は都合のよい時間と場所で練習が可能となる。

さらに教員が提出された受講生の音声にコメントをすることもでき、また発音を可視的に表示して発音矯正に役立てることもできる方法である。今回の研究は、そのような Web 学習環境を導入して大学において1年間実験運

用し、その効果と課題について検討するものである。本稿では、1年のうちの前期に実施した部分について次節に報告する。

4.2 SE の具体的な実施例

SE はすでにアメリカで英語、ドイツ語、フランス語、中国語、日本語の学習教材として使われており実証報告が出されている(池田・深田 2012)⁽⁸⁾。韓国語の教育に SE を使う利点としては、上述した韓国語の文字と音のずれを習得する有効な方法だという点が挙げられる。SE を活用すれば、一対一もしくは少人数のクラスでしかできない個別の口頭練習を学習者自身の自由な時間に任せて行うことができる。限られた授業の時間を有効に活用できるという点が、SE の最も重要な機能の一つである。

通常の授業に加え、SE のプログラムを利用した一日5分から10分の練習で、発音の問題が飛躍的に改善されると見込まれる。例えば、連音化の練習としては以下のようなパターンで単語から徐々に文へと展開していくものを考えることができる。

連音 (Liaison) の練習

- 1 名詞のみでの連音化する単語を練習する。

한국어 (韓国語)

- 2 名詞+助詞の形で連音化する例を練習する。

선생님은 (先生は)

학생들이 (学生は)

이것은 (これは)

- 3 名詞+終結語尾の形で連音化する例を練習する。

무엇입니까 (何ですか)

닫았습니다 (閉めました)

찾았습니다 (見つけました)

- 4 名詞+助詞+活用語

책이 있습니까? (本がありますか)

어느 나라 사람입니까? (どの国の人ですか)

5 完全な文を練習し、課題を読めるように誘導する。

선생님은 어느 나라 사람입니까? (先生はどの国の人ですか)

さらに、文を基本文型から複雑な文へと練習をしていくこともできる。

SEを活用したパターンの練習を、中央学院大学法学部の韓国語の授業で、2012年度に実験的に導入してみた。実験群となるクラス、1年生17人に、まず、1と2の形式の課題を1週間に1回、12週にわたって計200問、課した。

受講生の反応は、当初、提出日直前にやっと提出する 경우가多く、受動的なものであった。しかし、回数を重ねるごとに積極的に取り組むようになり質問が出るようになった。これは、CDを一度も聞いていない受講生が多かったこれまでの状況と比べると、大きな変化である。

なお、2012年度の韓国語のクラスは1年生で2クラスあり、統制群となるクラスではSEを全く実施していない。1年間の授業の終了時に発音の変化と学習到達度について調べる予定である。SEを導入した実験群では、文字と音のずれにつまずく前に、音声のインプットを真似することで抵抗が和らぎ、口頭練習の機会を増やすことで発音への恐怖も心配も軽減できると思われる。

半期分のSEを使った授業を終えた時点での満足度調査をみると、半数以上が肯定的に評価している。

表2：SEを使った授業の満足度

たいへん良い	3
良い	7
良くない	2
とても良くない	0
分からない	6

5. 導入のための SE の検討事項

現状の文字中心の韓国語教育から、コミュニケーションツールとして使える韓国語を目指した場合、SE は、文字と発音のずれを効果的に修正するだけでなく、より多くの場面で応用が可能である。例えば、ビデオクリップを使った状況の例示と反応をみることもできるだろうし（この場合は適切な反応があればよい）、暗記カードのように視覚と聴覚を利用した学習法も可能である。⁽⁹⁾

ただし、大学の教養科目で利用するにはいくつか考慮すべき点がある。それは、

- 1) 客観性のある評価
- 2) 努力、向上心を引き出せる教材の開発
- 3) 教員の資質

である。

まず、評価については、SE を活用する音声重視の授業をした場合、筆記テストのみの評価で成績をつけることは、妥当性を欠くことになる。これについては、SE の課題の提出を成績評価に含め、さらに授業内容に応じたオーラルテストを実施することで解決できる。SE を使って提出された課題やテストの解答は、音声ファイルとしてサーバーに保存・管理・ダウンロードすることができるので、客観的な評価が可能である。

教材の開発は最も優先される問題である。録画、録音、スクリプトの作成等チームティーチングができる環境でなければ、すべて一人の教員がこなさなければならない学期の途中に作成することは物理的に難しい。また、教材が学習者の努力、向上心を引き出せるようなものでなければ、主に彼らの自学自習に供される SE は、継続して使われることが難しくなるだろう。質の良い教材の開発が模索されていかなければならない。

教員の資質については、それぞれの教員の教育観や目指すところが多様で

あったり、コンピュータースキルのレベルもさまざまであったりして、SEを教材として効果的に使いこなせるかどうかの問題が出てくる。教材はより一般的なものであり応用が可能であると同時に、直観的な操作ができる導入のしやすい、教員側にとっても「やさしい」教材を開発することが必要である。

6. おわりに

大学の韓国語教育においては今まで様々な試みがなされてきた。紙媒体、LL教室での語学学習、e-Learning、PDF教材、音声ファイルのWebを経由した学習者への提供、最近ではWebカメラを利用したネイティブとの会話の練習などもある。

SEは、これまでの外国語学習の弱点をカバーできるツールである。それは、音声ファイルの交換を通じて教員と学習者を結ぶことを可能にする。

SEを使うことで、授業外で聴ける音声はテキスト付属のCDの例文のみというような状況から、より即応性の高い会話のスキルを短時間で習得できる授業にするが可能になると考えられる。

ただし、システムを有効に活用していくには、良質な教材の作成、アーカイブの蓄積が必要である。さらに授業の満足度を上げるための教員の工夫が必要である。しかし、それらのハードルを考えても、今回取り上げた音と字のずれの練習のみならず、韓国語教育の全般において、コミュニケーションツールとして使える言語を目標としていく上で、SEは大きな可能性と拡張性を持っていることは間違いない。

〔注〕

- (1) 韓国語という呼び方については韓国国内ではハングルもしくは国語、日本においては学術的には朝鮮語という名称であるが本稿では韓国で使われることばという意味で韓国語とする。

- (2) 括弧のなかは，調査時の学年。原文のママ。
- (3) 一般韓国語能力試験 (Standard TOPIK ; S-TOPIK)。日本語訳は著者，朴による。
- (4) 音節：音の単位。音として出すことの出来る最小単位。母音，または子音と母音で構成される。
- (5) ハングル正字法 (한글 맞춤법) は実際の発音と若干異なっても音と形態に関する規則，すなわち語法をたてそれに合うように書かせることである。(『중보 한글 맞춤법 강의』이희승외, 신구문화사, 2010)
- (6) 一つの音節の最後の子音を終声という。
- (7) 以後 SE と略称する。
- (8) 池田順子・深田淳 (2012) 「Speak Everywhere を統合したスピーキング重視のコース設計と実践」『日本語教育』152号 pp. 46-60.
- (9) この点においては環境が整っておりコンテンツの開発があれば取り組むことができる。

【参考文献】

- 池田順子・深田淳 (2012) 「Speak Everywhere を統合したスピーキング重視のコース設計と実践」『日本語教育』152号 pp. 46-60.
- 一般韓国語能力試験ホームページ <http://www.topik.go.kr> (2012年10月21日参照)
- Speak Everywhere <http://speak-everywhere.com/> (2012年10月21日参照)